妹がいじめられて自殺したので復讐にそのクラス全員でデスゲームをして分からせてやることにした

駆威 命 Mikoto Kakei

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

登校（プロローグ）――残り生徒数　30人

ごめんなさい、お姉ちゃん、おばあちゃん、おじいちゃん。先立つ不孝を許してください。
天国のお父さん、お母さん。もうすぐ会えるからね。
私、優乃はもう限界です。
私はずっといじめられてきました。
ずっと、ずっとです。
山岸優や小野田人士から殴られ、悪口を言われてきました。倉木……剛久は……私に……。
旗野満は、私にお金を持ってくるように言って……少なかったら……売れって……言ってきました。
日谷沙耶香や横倉咲季からも……凄く、凄く嫌なことを言われてきました。
みんなからも無視されたり、嗤われたり、いたずら書きされたり……いろんなことをされて……。
辛かった。
悲しかった。
思わず助けてって言ってしまうくらいに。

でも、無理でした。誰にも助けてもらえませんでした。
そのことを先生に言っても、ほんの少しの間だけ収まって、しばらくしたらもっと酷いことになって返ってきます。
どんなことをしても無駄でした。
だから、もう、疲れたんです。
諦めました。
諦めました。
諦めました。
私は生きていちゃいけないんだそうです。
河野詩織からそう言われたけれど、その通りだと思います。
私はみんなに迷惑しかかけてないから。
私が死んだら、学費を出してくれているお姉ちゃんも、自分のことにお金を使えるようになるはずです。
私に時間をかける必要もなくなると思います。
前、男の人に振られたって言ってたけど、あれ私のせいだよね。ごめんなさい。
もう、自由になってください。
さようなら。

最後に。
私がこうして自分を終わらせられる勇気を――。

◇

『はい、全員起床！　起きろ～！』
底抜けに明るい女の人の声が耳から侵入してきて、僕の脳みそを踏み荒らす。
酷い風邪をひいた時のように激しく頭が痛み、全身が泥の中にでも浸かっているかのように重い。こんな気分なら、いくら起きろと言われてもまったく起きようという気にならなかった。
だから僕は耳を押さえてもう一度夢の世界に引きこもろうと――。
『今から大事なことを言うから～。きちんと聞かない人は死んじゃうよ～』
「……え？」
聞かないと、死ぬ？
誰が？　僕が？　なんでそんなことになるの？
僕が今生きている国は、世界一安全と言ってもいいはずなのに……。
頭に浮かんだ疑問への答えを得るために、僕は重いまぶたを開く。
最初に視界に入ってきたものは、金属のパイプを曲げて作られた、学校でよく使われてい

る机の足。そして、白い壁や見慣れた掲示物。
『ほらほら、早く起きて首元を確認してごらん』
まだ頭のモヤは完全に晴れていなかったが、言葉に従って首元に手を伸ばし――。
コツンと、何か固いものが指先に触れた。
「……なんだ、コレ」
上体を起こしながら手で触って確認すると、首輪らしきものが嵌められているみたいだった。
そこでようやく、辺りに僕以外にも誰かがいることに気付く。
整然と並べられた学習机の合間合間に、黒い人影が横たわっている。誰も起き上がっていないところを見ると、目を覚ましたのは僕が最初みたいだ。
僕は立ち上がり、周囲を見回す。この見知った場所は、僕が通っている宮城原高等学校の、二年一組の教室。つまり、僕が毎日勉学に励んでいる教室だ。
今が何時なのかは分からないが、窓の外は何も見通せないほど暗い。天井の明かりがこうこうと教室内を照らし出していた。
『お、一人目を覚ましたみたいだね。おっはよー！　誰も起きないから心配しちゃったよ』
教室前方、教壇の右隣に設置してある大きなテレビが一人の女性を映し出している。先ほどから聞こえる女の人の声は、どうやらそこから流されているようだった。
「お、おはようございます？」

一応そう挨拶をしたが、今はそんな時間ではないのだろう。
そもそも何故僕がこの慣れ親しんだ教室にいるのか、その理由が分からない。
確か今日は緊急の学級集会だとかで、土曜日なのにもかかわらず朝からクラス全員が体育館に集められて、先生のお説教を聞いたあとに視聴覚室へ行って……そこからの記憶が完全に欠落している。
思い出そうとしても、鈍い頭痛がするだけで記憶の取っ掛かりさえ掴めない。
『挨拶を返せるなんて感心感心。もうちょっと起きてきたら説明始めるから少しだけ待っててね～』
「あ、はい」
テレビ画面に映っている女性は、肩までの長さの髪を茶色に染めてちょっとはすっぱな雰囲気だというのに、まったく化粧っ気がない。目元がはっきりとした少しきつそうな感じのする顔で、何より僕がよく知る、決して忘れてはならないあの少女と顔立ちがよく似ていた。
『ほらほら、他の人たちも早く起きないと死んじゃうぞ～』
「し、死ぬ……？」
やはり先ほどの言葉は聞き間違いではなかったらしい。またこの女性は「死」という言葉を口にしていた。
『質問はなし。うるさくしないでね。ぜ～んぶあとで説明するからその時分かるよ。ルールを守らないと死んじゃうからね？　いや――』

女性の口が裂けてしまったのかと錯覚するほどニィッと横に開く。冗談っぽい声音なのに、思わず吐き出してしまいそうなほどの悪意を感じてしまう。

いや、違う。この人が抱いてるものは悪意なんかではなく――。

『――殺すから』

――殺意そのものだ。

背筋を悪寒が走り抜け、先ほどまであった倦怠感などすっかり吹き飛んでしまった。

僕は喉をならして唾を呑み込むと――。

「……はい」

なんとかその一言だけを絞り出した。

『ん、素直でよろしい。どうせだからお姉さんのお手伝いしてくれるかな？　周りのみんなを起こしちゃって』

明らかにノーと言えるような雰囲気ではなかった。方法は分からないが、殺すと言っているのだからなんらかの手段が用意されているのだろう。

――と、そこで僕はあることに気付いた。

「これ……」

僕の首に巻かれた金属製と思しき首輪。見れば、床に横たわるみんなの首にも同じようなものが取り付けられている。

嫌な予感がして思わず首輪に手をやると、女性から忠告が飛んできた。

『あ、蒼樹空也クン。あんまり触りすぎると誤作動で爆発しちゃうかもしれないから、いじりすぎないようにね』

――爆弾？

にわかには信じられないが、この首輪は映画や小説なんかでよく出てくる代物のようだ。

僕は慌てて人の間を縫って窓の近くにまで移動する。そして、また一つ異様な光景を目にした。

窓のすぐ向こう側が、何か金属製の板のようなもので塞がれている。この金属板が覆っているせいで、光が入ってこないらしい。

何故窓が封鎖されているのか気になったが、それよりも先に首輪を確認しようと思い、僕は窓ガラスに薄く反射した自分の姿を観察した。

黒髪黒目、コンプレックスの塊である低身長。本当に高校生なのかと思われてしまうほど幼く、自信のなさそうな顔つきをしている僕、蒼樹空也が、まっすぐにこちらを見返してくる。そんな僕の首筋には、鉄パイプを輪っかにしたような形の無骨な首輪が嵌められていた。喉元の部分には赤いＬＥＤが付いた直方体の小さな箱が接着している。これが爆弾なのか？

『ほらほら、早く起きないと、お姉さんイラついて爆発させちゃうぞ～』

テレビから聞こえてくる嘲笑うような声には、根底に何か恐ろしい感情が潜んでいた。

◇

僕は隣に横たわる、苗字しか知らないようなクラスメイトを揺さぶって起こす。その目覚めたクラスメイトがまた別の生徒を起こし、波紋のように覚醒の波が広がっていく。

ものの五分もしないうちに、教室で眠っていた全員が目を覚ました。

ざっと見ただけだから自信はないが、おそらく僕を含めてクラスメイト三十名――いや、今は二十九名か――が全員いるはずだ。

そしてその全員に、爆弾と思われる装置の付いた首輪が嵌められていた。あの女性の言葉が真実であるなら、僕たちはみんな彼女に命を握られていることになる。

「おい、なんだこれは！　ふざけんな！」

「くそっ、扉が開かねえ！」

目覚めた人数が増えれば増えるほど、ざわめきが大きくなっていき、今では誰も彼もが好き勝手に叫んでしまっている。みんなの目が覚めたらテレビの女性が説明を始めると言っていたが、こんな状況ではとても彼らの耳には届かないだろう。

僕がテレビに視線を向けると、女の人はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべているだけで、まだ口を開いてはいない。もしかしたら、どうすればみんなを黙らせられるのかを考えているのかもしれなかった。

その方法がまともなものとは限らない……。

突然、僕の脳裏に「見せしめ」という言葉が浮かんだ。もしクラスメイトがこのまま静かにならなかったら、彼女は爆弾を爆発させるのではないか？

そしてその見せしめの対象が、僕だとしたら……？

そういう考えに行きついた途端、臆病な僕は恐怖に背中を突き飛ばされて行動を開始した。

足りない身長を補うために、より目立つために、机の上に立って叫ぶ。

「静かにしてっ。じゃないと殺されるっ！」

僕の一言で、あれほど騒がしかった教室が一瞬で静まり返った。クラス全員の視線が僕に突き刺さってとても居心地が悪い。多分、僕の言葉を聞いて静かになってくれたわけではない。普段クラスの中でも地味で目立たない僕が、こういう変な行動に出たことに驚いたのだろう。

「なんだ、蒼樹。変なこと言ってんじゃねえぞ」

一瞬の間のあとにそう脅しつけてきたのは、高校生だというのに短く刈り上げた頭を金色に染め、やたらと攻撃的な目つきと態度が特徴的な男子生徒、山岸優だった。背が高くて筋肉質な彼はこのクラスにいる不良たちをまとめ上げるリーダーのような存在で、おそらく僕たちがこんな状況に立たされた原因を作ったうちの一人だ。

「あ？　殺される？　は？　ざけんなよ」

山岸は威圧的な体と高圧的な態度で僕を嬲ってくる。

「なんでそんなこと知ってんだよ」

「そ、それは……」
君より先に起きたからだ、と理由を言えばいいだけなのに、舌がもつれてうまく説明できない。これまで山岸に何度も理不尽に殴られた記憶がよみがえる。
彼の視線を受けるだけで反射的にすくみ上がってしまうほど、僕は山岸を恐れていた。
「つうか降りろてめえ。なに見下ろしてんだよ、あぁ？」
「ご、ごめ――」
『いや～、一人二人殺して黙らせようと思ってたのに静かになっちゃったなぁ。残念残念』
場にそぐわないほど底抜けに明るい女性の声が割って入る。
「あぁ!?」
山岸がその女性の方――つまりテレビの方を振り向いた。
『チャオー、初めまして。突然だけど私があなたたちの命を握ってるって言ったら信じる？』
テレビに映る女性は、笑顔でそんなことを言っている。酷く現実感がないのに、彼女の言葉は全て真実であると僕には感じられた。
だって彼女はきっと、理性のタガが外れてしまっているから。
「なんだてめぇ。フカしてんじゃねえぞ。やれるもんならやってみろや」
山岸の矛先が僕からテレビの女性に移ったことに胸を撫で下ろしつつ、僕はこっそり机から降りる。その間も、山岸はテレビに向かって怒鳴っていた。
「お前が俺らを眠らせたのか？　ぶっ殺してやっから出てこいや」

「なー。できねえと思うんじゃねえぞ」
不良グループのリーダーである山岸が強気に出たからだろう。仲間たちも口々に強気な発言をし始める。だがテレビの女性がそんな脅しに屈するはずもなく、笑顔で勝手に話を続けていく。
『私は君たちが死ん――の一度しか――ないからよく――――』
「あぁ？　いい加減にしろよてめえ。ここから出しやがれ」
山岸たち不良グループのメンバーは、女性の言葉に被せるように脅し文句を並べ立てた。おかげで彼女の言っていることの半分も聞き取れない。この異常な空気を感じ取って他のクラスメイトたちは全員黙ってるのに、彼らはそんなこと気にする素振りも見せなかった。
そんな空気の読めない不良たちのことを、よく思わない人がいないわけではない。立ち尽くしているクラスメイトたちを掻き分けながら、一人の男子生徒が山岸の前に進み出る。
「いい加減にしろ、山岸っ。今がどうなってるかも分からないんだ、少しは静かにできないのか」
「あぁ!?　今更いい子ぶるんじゃねえよ、多治比。そういうところがうぜぇんだよ」
どのクラスにも一人はいる、学級の中心となる存在。うちのクラスでは、多治比正邦という男子生徒がそれだ。彼は活動的かつ嫌味のない性格で、恵まれた体格を生かしてバスケ部の部長を務めている。さらに爽やかな外見も相まって、女子からの人気が非常に高かった。
「今更だからだろう。お前はあんなことがあっても反省しないのか！」

「俺に関係ねえんだよ！」
多治比と山岸の二人は、正面切って睨み合う。周りの空気は間違いなく多治比の味方だが、山岸はそんなのに怯むような生易しい不良ではない。むしろ疎外感に対して意地になり、さらに噛みつくような奴だった。
『それじゃあ首輪のソレが本物だと信じられない人たちのために～、ＶＴＲをどうぞ～』
首輪を触ろうとした僕に注意してきたし、教室内で起きていることが見えているらしい。隠しカメラか何かを通して監視しているのかもしれない。
それなのにまるで何事もなかったかのように話を進めていくのは、本当に僕たちがどうなってもいいからだろう。
「うるさい！　静かにしてよ、山岸！」
その時、女子からも文句の声が上がった。
「あぁ⁉　……って河野か」
山岸を怒鳴りつけたのは、女子グループの中でも最上位のヒエラルキーにいる存在、河野詩織だ。長いストレートの髪を怒りで揺らし、形のいい眉をつり上げている彼女は、クラスの女王様と陰口を言われるほどの美貌と、高慢さを持ち合わせている。
「映像が始まる。見逃したらどうするの？」
「……そうか」
あれほど怒っていた山岸が、その一言で魔法のように大人しくなった。

理由は分かっている。山岸は河野に対して気があるのだ。もちろん歯牙にもかけられていないのだけれど。
うるさかった原因が口を閉じたことで、教室の中が水を打ったように静まり返る。テレビの音声を聞き逃す心配がなくなり、また、険悪な空気が多少なりとも収まったことで僕はこっそりと吐息を漏らした。
全員の視線がテレビに集まる中、映像が真っ暗なものに切り替わる。
『違うんだ！　頼む、やめてくれ！』
そして、必死に懇願する男の声が流れた。
「……今の声、佐竹先生じゃないの？」
女子の誰かがそう言った。確かに言われてみれば、それはこの二年一組の担任である佐竹正則先生の声だった。
映像の中でがさがさと布が擦れるような物音がし、画面の中心にパッと白い光の円が現れる。撮影者がカメラに付けられたライトを点灯させたらしい。
ライトに照らされて映ったのは、教員室と思われる部屋だった。その真ん中で、スーツ姿の佐竹先生がまるで土下座でもするように床の上に両手をついて四つん這いになっている。
『まったく～。台本通りに話してくれないとダメじゃないですか～』
再び女性の声が聞こえたと思ったら、ぐるりと画面が回転する。そして先ほどまでテレビに映っていた女性の顔が現れた。

『はーい、それじゃあ今からあなたたちの首に付いた爆弾のことを説明しまーす』
「爆弾ってどういうことだよ！」
「何よそれっ」
「黙ってろっ！」
あちこちから悲鳴が上がったが、山岸が怒鳴りつけたことですぐにざわめきが収まった。先ほどとは立場が逆転している。彼も今の状況の深刻さを認識したのかもしれない。
『頼む、やめてくれ。殺さないでくれ。すまなかった、謝るから！』
佐竹先生は命の危険が迫っていると本気で信じているみたいに、ガタガタと体を震わせ命乞いをしていた。
『だからぁ、台本通りにしてくださいって。役に立たないなら今すぐ殺しますよ』
女性の言葉に息を呑んだ先生が、すまないすまないと念仏を唱えるように謝り続けながらゆっくりと起き上がって頭を上に反らす。
佐竹先生の首元には、僕たちがしているものとまったく同じ首輪が取り付けられていた。
『見える～？　この首輪が爆発する条件って三つあるの。よく聞いておいてね』
言われなくても僕らは画面から視線が離せなかった。全神経を集中して、たった一言も聞き逃さないように耳をそばだてる。
『一つ目は、首輪を無理やり外すこと。ヤンチャな人が引っ張ったら結構簡単に外れちゃうから気を付けてね？　死にたいなら別だけど』

眠りから目覚めた時、首輪を無理に外そうとしたクラスメイトがいなかったのは本当に幸運だった。もし外そうとして爆発し、死人が出ていたら、おそらく教室の中はパニックに陥って、今のように静かに話を聞くなんて不可能だっただろう。
『二つ目は、この宮城原高校の校舎から出ること。出た瞬間に爆発して死んじゃうからね』
……ということは、ここはどこか別の場所に作った似ているセットとかではなく、やはり本当に僕たちの通う学校なのか。それなら、どのくらい時間がかかるかは分からないけど、いずれ間違いなく警察や救助の人たちが来るはずだ。
時間制限があることに、少しだけ、本当に少しだけ安堵する。
『最後の一つは、この制御用のリモコン』
女性はそのリモコンとやらを画面に映す。それは、コードとアンテナが付いている箱状のものをタブレットの上部に取り付けた装置で、一般的なリモコンとはだいぶ形が違った。
『これで私はいつでも、好きな人を、好きな時に殺すことができる。分かった？』
分かった？　と言われたところで、あまりにも非現実的で実感が湧かないのだろう。僕の周りでテレビを見ているクラスメイトたちは、みんな懐疑的な表情を浮かべていた。目覚めてから時間が経ったことで、正常性バイアスのようなものが働き始めたのかもしれない。
だけど、僕はこの女性が真実しか話していないことを確信していた。
彼女は一見明るく振る舞っているが、内心では間違いなく怒り狂っている。
怒りが大きすぎる故に、怒鳴ったり暴れたりするなんて普通な方法で表現しないだけ。

そして、今ようやく僕らに復讐できるようになって、嬉しくてたまらないだけなんだ。
僕は彼女が何者なのかほとんど確信している――もしかしたら、他のクラスメイトも同様かもしれない。
『はい！　それじゃあ信じてくれない人のために、実際に爆発させてみよう！』
『やめてくれぇぇ！』
僕の予想を裏付けるように、女性は楽しそうにそんな決断を下した。
『申し訳ないと思っている！　私が力不足であんなことになってしまったことは本当に後悔しているんだっ――いえ、しています！』
自分の死が避けようのないものだと悟ったのか、佐竹先生は顔じゅうを涙と鼻水でぐちゃぐちゃにしながら、必死で女性に縋りつく。画面がひっきりなしに揺れ動き、ノイズに交じって佐竹先生の懇願が聞こえてきた。
『心から、心から謝罪させていただきます！　ですからお願いします、殺さないでください！』
『大丈夫大丈夫。爆発自体は大したことないから、会見で見せた面の皮の厚さなら耐えられるって』
『あ、あれはマニュアルがあるからそうしただけなんですっ。校長と教育委員会から命令されて仕方なく言ったことなんです！』
『へー、それでいじめの事実はありませんでした、なんて言えちゃうんだ』

『そうすればいじめた生徒をＳＮＳの攻撃対象から逸らすっていう効果があるからそういう風に言うことが決まってるんですっ！　私の意思じゃありませんっ！』
『うわっ。優乃のことは守らなかったのにいじめっ子のことは守るんだ。すごいね』
そうだ、それがきっとこの人の理由。
こんなことをしでかした動機。
彼女は、僕たちへの復讐をするつもりなのだ。
『私だって守りたくなんてないんです、あんな奴ら！　でも、たとえどんなことをしても全ての生徒を守るのが教師の役目だと言われて……』
『そう言われて納得したのかー。立派な先生だ。感動で涙が出ちゃいそう』
女性は欠片もそう思っていないことが分かる棒読み口調で言うと、佐竹先生を蹴り飛ばした。
しばらく画面が揺れ動いたが、やがて佐竹先生が床に寝転んで呆然と中空を眺める顔が映し出されたところで静止する。それは、決して逃れられない死を前にして、心の全てが絶望で埋め尽くされている人間の顔だった。
『はい、それじゃあこれが佐竹先生の最期の授業です。みんな、よく見ててね～』
女性は場違いなほど明るい声でそう言うと、タブレット型のリモコンを佐竹先生の方へ突き出し、スッと親指で画面をタップした。
瞬間、パンッという運動会で使われるピストルのような乾いた破裂音が響き、同時に佐竹

先生の首元から赤い霧と白い煙が噴き上がる。
「きゃぁぁぁっ」
ゲームや映画などとは違う、本当の殺人。
作り物ではない衝撃的な映像を見たせいか、クラスの女子何人かが悲鳴を上げる。それを皮切りに、教室の中が一気に混乱のるつぼと化したが、それを注意できる人はいない。そんなことをできる余裕が、誰にも残っていなかった。
『が……ひゅっ……ごぷっ』
佐竹先生は首元を吹き飛ばされてもまだ命があるのか、傷口に手をやって苦しそうに身悶えていた。手の隙間からは鮮やかな赤い液体がドロドロと溢れ出す。そのまま数秒間、佐竹先生は顔を強張らせながらガクガクと痙攣し……目を見開いたまま命を落とした。
佐竹先生は、あまり熱心な先生ではなかったかもしれない。それでも一応問題を解決しようとして動いて……結局なんの成果も上げられず、無駄な徒労に終わってしまった。しかし、こんな風に殺されてしまうほど悪いことをしたとは、僕にはどうしても思えなかった。
『以上、首輪の機能についての説明でした～。それではスタジオにお返ししま～す、ばいば～い』
相変わらず軽い口調で女性がそう言うと、ぶつっと嫌な音を立てて映像が途切れた。

◇

真っ暗な画面を前にして、全員パニックを起こしていた。意味もなく怒鳴る人、恐怖のあまり首輪を外そうと試みる人、それを必死に止める人、ショックのあまりその場に座り込んで泣き出してしまう人、教室から逃げ出そうとドアを開けようとし、窓を必死に叩く人……。
それぞれが好き勝手に動いていた。
そんな中、一拍間をおいてからテレビが点灯する。
『いやぁ、こ――――初め――――から手間――――ちゃった、ごめ――』
騒音のせいで、声が、聞こえない。
「ふざけんな！　これ外せ！」
「いや、お母さん助けてぇ！」
「おい、こんなところ出るぞっ。どうせハッタリだ！」
「静かにしろっ！　みんな、静かにするんだっ‼」
正義感の強い多治比が必死になってみんなを鎮めようと怒鳴っているが、それが余計混乱に拍車をかけてしまっている。今パニックに陥ってしまったみんなは、もう冷静な判断なんてできないようだった。不良グループたちは雄叫びと共に出入り口へと突進し、ドアを足で蹴りつける。その勢いでドアが外れたが、窓と同じく出入り口を覆うように金属板が取り付けられていたらしく、扉と固定された金属板とがぶつかって派手な音を立てた。
「やめろ、山岸っ。勝手な行動を取るなっ」

「うっせぇ‼　俺に命令してんじゃねえっ‼」
テレビではまだ女性が何か言っているのに、それを無視して喧嘩まで始まってしまう。
これからが重要なはずなのに。今まさに、僕らの命に関わることを言っているはずなのに。
「ごめん、どいてっ」
僕は生き残るために少しでも情報を得ようとして、クラスメイトを掻き分けながらテレビの方へと進む。しかしテレビの位置はみんなが殺到している出入り口の近くにあるため、容易に近づくことができなかった。
「おい、天井にカメラがあるぞ！」
誰かの声がして視線を上に向けると、教室のちょうど中心、それから四方に監視カメラが取り付けられているのが見えた。
「取っちまえ！」
「よしっ、机押さえてろ」
正直、耳を疑った。
そのカメラは間違いなくあの女性が、僕らを監視するために設置したものだ。そして、僕らの首にはいつでも起爆できる爆弾が取り付けられている。下手にカメラに触れたら最悪の結果しか予想できないというのに、パニックに陥った彼らは、そんな簡単なことすら考えられないみたいだった。
「やめてっ」

僕が叫んでも、他の物音に掻き消されてしまって届かない。直接止めようとしても、人の波に呑まれてしまっている状況では不可能だった。
「ダメだよ、そんなことしたら！」
僕の言葉もむなしく、一人の男子生徒が机の上に飛び乗って天井へ手を伸ばした。
その指先がカメラに届きそうになった瞬間――。
――パンッ。
乾いた音と同時に、先ほど映像で見たものと同じ、真っ赤な血煙が上がった。
「きゃぁぁぁぁっ‼」
悲鳴のあと、一拍遅れてその男子生徒の体が傾ぎ、どうっと頭から床に落下する。
間違いなく、死んだ。たとえ爆弾による即死でなくとも、あんな倒れ方をして無事なわけがない。
『ねえ、今の高校生ってこんなに馬鹿なの？　私の時は……って私、高校行かずに働いてたや』
教室が静まり返る中、テレビの女性の心から不思議そうな声が響く。
『さっき私見せたよね？　このリモコンでいつでも爆発できるっての。私に不利になることをしてるのにさ、爆発させないわけがないじゃん』
画面に目を向けると、女性が手にリモコンを持っている様子が映し出されている。彼女がどこにいるのかは分からないが、リアルタイムで僕たちを監視していて、テレビを通じて直

接やり取りをしていることはもはや疑いようがない。
『お、静かになって良かったねぇ。その子も死んだ甲斐があったと思うよ』
「……なんで！　なんで匠吾を――人間をそんな簡単に殺せるんだ!?」
多治比はこのクラスの中心的な存在だけあって、いろんなクラスメイトと仲がいい。今死んだばかりの中砂匠吾も、多治比とよく一緒にいるのを見かける一人だった。
『なんで？　あなたたちも殺したじゃない、偽善者クン』
あれほど激昂していた多治比が、その一言で黙り込む。
そう。彼女の言う通り、僕たちも一人のクラスメイトを死に追いやってしまっていた。
『私のたった一人の妹、古賀優乃を殺したじゃない。忘れたの？』
古賀優乃。
彼女はこのクラスで酷いいじめにあっていた。いたずら書きなどの嫌がらせや無視、配布物や持ち物を捨てるなどは当たり前。人格を否定するような暴言や暴力が振るわれ、性的な暴行もされたんじゃないかって噂まであった。
もちろん、いじめの件は噂になるくらいだったから、何度か先生たちの介入があったけれど、全て無駄だった。注意があると一時的になりを潜めたようではあるが、時が経てばまたいじめが再開してしまう。しかも、次はより陰湿に、より激しく。
そんないじめがずっと続いて、耐えられるはずがなかったのだ。
彼女は一カ月前、首を吊って自分で人生にピリオドを打った。

――自殺、してしまった。
『そういえばあなたたち全員、私に誰だとは聞かなかったよね。やっぱり分かってた？』
もちろんだ。
テレビに映る女の人の顔は、死んだ古賀優乃と似ている。関係ないと考える方が不自然だ。
『今自己紹介しておこうか。私の名前は古賀彩乃。あの子の家族で肉親で、あの子がこの高校で楽しく学校生活を送っていると思い込んでいた間抜けな姉』
「あ、あいつは勝手に自殺したんだ！　俺は殺してない！」
恐怖、罪悪感、逃避……。様々な感情から、山岸が自分を正当化するかのような言い訳を口にする。呆れてしまうような言葉だったが、それはテレビの女性――古賀彩乃の神経を逆撫でするのには充分だったらしい。
『へぇ』
彩乃は手に持ったリモコンを操作して――。
『なるほど――ねぇ』
途中で手を止めた。
画面越しにでも見て取れるほど、彼女の手は怒りに震えているのだが、それでも彼女は決定的な操作を――いじめの主犯である山岸の殺害をしなかった。理由は分からないが、感情のままに山岸を殺したくはないようだった。
もっとも、この状況を破綻させる可能性が生じた場合は嬉々として殺すのだろう。中砂を

ためらうことなく殺害したように。
『なるほど……ね』
彩乃は何度も深呼吸をして、自分の感情を飼いならそうとしているように見える。やがて時間をかけてそれに成功したらしく、彩乃は再び歪な笑みを浮かべた。
『……話を戻すけど、さっきのカメラを壊そうとするみたいな、私の不利に働く行為をした人は容赦なく殺すから。それは理解しておくように』
その言葉に逆らえる者は、誰もいなかった。
沈黙を肯定と取ったのか、彩乃は満足げに頷く。
『それじゃあ、これからあなたたちにはちょっとしたゲームをしてもらうけど、嫌とは言わないよね』
そして、そんな不穏なことを言い出した。

一時限目――残り生徒数　28人

「な、なんでそんなこと俺らがやらなくちゃならないんだよ！」
『そんなに難しいゲームじゃないからダイジョブダイジョブ』
男子生徒の一人の恐怖からの反発を、彩乃はパタパタと手を振っていなす。そもそも彩乃は教室を封鎖し、僕たちの首に爆弾を仕掛け、人を二人も殺したのだ。ゲームを拒否させるつもりなんて、絶対にない。
『そこの教卓の中に機械があるんだけど、誰か出してくれる？』
そこの、というのは黒板の前に設置してある教卓のことだろう。だが、彩乃の指示に従って動く者など誰一人としていなかった。僕も、下手に動けば何かされるんじゃないか、ゲームとやらの見せしめに使われてしまうんじゃないかと思ったら、足が凍りついたように動かなかった。
誰もが動かず体を固くしている中、ただ一人、多治比だけが動き出す。彼は教卓の中を覗き込み、数字を打ち込むためのテンキーボードを改造したような四角い機械を取り出し教卓の上に載せた。
『はい、ご苦労様。それじゃあゲームのルール説明をするね』

そう言って彩乃も同じような機械を足元から持ち上げ、カメラに近づけて画面に映す。機械には上部に長方形のモニターが取り付けられ、その下には0～9までの数字やエンターキーが書かれた、押しボタンが並んでいた。

『今、あなたたちのいる教室には、カードが二十八枚隠されています』

こういうカードね、と言いながら、彩乃は機械を画面から外して代わりに名刺サイズのカードをかざす。

そのカードには、0111と、四桁の数字が書かれていた。

『カードを探して、そこに書かれた数字をこの機械に入力して……』

彩乃は呟きながら、機械に数字を入力してみせる。

機械上部のモニターには、0111との数字が並んだ。

『エンターを押す。これだけ。簡単でしょ?』

彼女がエンターを押した瞬間、ピポッという音がして、上部のモニターが黄色く点灯した。

確かに簡単だ。

でも、僕は激しく嫌な予感がした。何故わざわざ二十八枚なのだろう。僕たちのクラスは三十人クラスで、優乃が自殺してしまったことで二十九人に減った。つまり、先ほどまでは二十九人がこの教室に存在していたのだ。

……カードが一枚、少ない。

『そうそう、今一人死んじゃったからさ』

彩乃はしゃがむと、え～っと、と画面外で何かを確認してから再び画面に戻った。

『0823のカードは使用不可にするね。つまり、有効なカードはあと二十七枚』

二十七……今生きている人数より、一つ少ない数だ。

『コードは一度使用したら無効。それから二十分以内にコードを入力できなかった人には……』

にたりと、彩乃が嬉しそうに哂う。

それで、理解した。復讐のためにただ殺したのでは生温い。子どもが平然と虫をいたぶってから殺すように――。

『……死んでもらうね』

彩乃も僕たちを弄び、オモチャにしてから殺すつもりだ。僕たちはそのためにこの場所に集められたのだ。

「どけよてめえらぁっ！」

誰かの怒鳴り声を皮切りに、みんなが走り出す。

「邪魔すんなぁ！」

「ちょっ、そこ私の机でしょ!?」

「知るかよっ」

「痛いっ。やめてぇ！」

隣にいるクラスメイトを突き飛ばし、同じ場所を探ろうとする者を殴りつける。罵倒が飛

び交い、あちこちで悲鳴や泣き声が上がる。たった一人の犠牲者になりたくないから。
クラスのみんながそうやって血相を変えてカードを探し始める中、僕は呆然とその場に立ち尽くしていた。
やがて。
「あったぁ！」
という歓声と共に、第一のカード発見者が現れる。彼は喜びながら人や机を掻き分けて進み――横から殴り飛ばされた。
殴り飛ばしたのは、不良グループの一人である倉木剛久だ。
倉木はそのまま第一発見者の上に馬乗りになると、何度も拳を叩きつける。よほどの力で殴っているのか、ごっ、ごっという鈍い音が喧騒を貫いて僕の耳にまで届いた。
やがてぐったりとした様子の彼からカードをもぎ取ると、トドメとばかりに唾を吐き捨てる。不良グループの面々は、古賀優乃の命を奪ったというのに、人を傷つける行為に迷いなど一切感じられない。命がかかった状況ではなおさら他人から奪うことに躊躇はないようだ。
「黙って渡すのが筋ってもんだろ」
倉木はそううそぶくと、不敵な笑みを浮かべながら教卓まで歩いていく。同じように奪う方が手っ取り早いと判断したのか、他の不良メンバーも探すのをやめて教卓の周りに集まり始めた。
「お前らも俺らの分を早く探せよ」

山岸が偉そうに命令した。誰もが反感を募らせるが、男女合わせて六人もいる不良グループにはなかなか逆らえない。クラス全員でかかれば彼らに勝てるだろうが、二十分という短い時間の間にそんなことをしているくらいなら、カードを探す方がまだ建設的だった。
「え～っと、１２３０っと……」
倉木が奪ったカードの数字を入力してエンターを押した瞬間――パンッと破裂音がして、倉木の喉元から真っ赤な血が噴き出した。
倉木は信じられないという顔をして、言葉の代わりにゴポリと音を立てて……その場に崩れ落ちる。不良グループの連中も完全に言葉を失い、死にゆく倉木を呆然と眺めることしかできなかった。
言われた通りに数字を入力したのに、殺されてしまった。
全員の頭に去来した、何故？　という疑問は――。
『バッカだね～。私、ルール説明の途中だったんだよ？』
けらけらと笑う彩乃の笑い声で引っ掻き回される。
『私の説明を最後まで聞かずに大声上げて探し回るからそうなるの、あはははは……』
間違いなく、わざとだろう。彼女は持って回った言い方をして、みんなの恐怖心を煽り、やってはいけない行動を、ルールを聞く余裕をなくしたのだ。
『私はさ、優乃を奪われたんだよ？　そんな私が、他人から奪うなんて行動、許可するわけないじゃん。譲渡は許すけど、奪うのは駄目。はい、これでルール説明はおしまぁい』

「なっ」

『というかさぁ……一般常識として他人のものを奪うのはダメでしょ。犯罪だよ？』

確かにそうだ。だが、それ以上の罪である殺人を犯している彼女が言うのは、とんでもない皮肉に思えた。

「てめぇっ！」

山岸がキレて、ツカツカとテレビに歩み寄る。もしそこに彩乃がいたのなら、殴りかかっていただろう。それができない代わりにテレビを両手で掴んで思い切りねめつける。

「舐めんなよ、ぶっ殺してやる！」

『あ、そ。でもいいの？　君がそんなことしている間に、他の人たちがカード見つけたら君の人生が終わるよ？』

山岸が食ってかかっている間に、他の不良メンバーは既にカードを探しにかかっている。そして、奪われる心配のなくなったクラスメイトたちが、見つけたカードを手に次々に機械へと殺到していた。倉木に殴られた男子生徒も起き上がり、再びカードの探索に戻った。

じりじりと迫りくる死の足音に耐え切れなくなった山岸は、即座に身を翻すと人の群れに突っ込んでいく。

「――くっそ、退けテメェらぁ!!」

他人を妨害しつつ探そうとでもいうのだろう。みんな、必死になって生きようとしていた。

なのに……。

「僕も、探さないといけないんだよね……」

僕はそんな気にはなれなかった。理由は分かっている。僕は――僕も、古賀優乃を傷つけてしまった一人だからだ。彼女と同じく不良グループにいじめられていた僕は、自分が傷つかないために言われるがままに彼女を無視したし、悪口に対しても愛想笑いを浮かべながら頷いた。

それから……僕が、僕の言葉が、彼女の背中を押してしまったんだ。僕があんなことを言わなければ、彼女はまだ生きていたかもしれない。だから、彼女の姉に殺されるのなら、それが正しい気がしてならなかった。

「時間まで、どうしよう」

ふと、床に転がる中砂の死体が目に入る。この混乱の中、何人かに蹴られ、踏んづけられてぐちゃぐちゃになってしまっていた。

「……」

これ以上傷つかないところに運んであげれば、彼の両親も喜ぶだろう。

それが最期にできる善行なら――。

「あれ？」

一歩踏み出した時、ズボンの左ポケットに違和感を覚えた。焦っていた時には分からなかったが、死を覚悟して冷静になった今だからこそ気付けた微かな異物感。その正体を探るために僕は手を突っ込み、それをつまみ出す。

「……なんで？」
僕の左ポケットの中に入っていたもの、それは、四桁の数字が書かれたカードだった。

◇

カードは十分としないうちに全て見つけられてしまった。それは同時に、処刑される生徒も決まってしまったということだ。
「ねえお願いっ。誰か私にカードをちょうだいよ！」
死を押しつけられたのは、柴村伴子。身長は平均より少し上。髪の毛を肩口くらいまで伸ばし、どこにでもいるような顔つきをした普通の女の子だ。
「お願いだからぁ！　何でもするからっ‼」
柴村は涙で顔をぐちゃぐちゃにして、機械に並ぶみんなへ向けて懇願する。
「ねえ吉屋。前私に告白してくれたよね。私のこと好きにしていいよ、なんでもしてあげるから。だから……」
性的な意味すら含む言葉。だが、そんな誘いを、吉屋と呼ばれた男子生徒は冷たい視線で一蹴して機械に自分のカードの番号を入力する。色仕掛けが通じないと悟った柴村は、すぐに視線を移して今度は別の女子生徒に縋りついた。
「――華凛、私たち友達だよね。譲ってよ、ねえ」

「やめて、来ないで」
「お願い、私まだ死にたくないの。いいでしょ？」
「……」
柴村はそれから何度も何度も頭を下げ、いろんな人に縋りついて、時には土下座すらした。でも、もちろん誰も譲るわけがない。カードを譲ることは、すなわち自分の命を差し出すのと同義なのだから。
みんながみんな、気まずそうな顔で目を背け、カードの番号を入力していく。あの正義感の強い多治比ですら、今回ばかりは手を差し伸べることができずに列に並んでいた。
「やめろっ」
柴村は一人の男子生徒にしつこくすり寄っていたが、蹴り飛ばされて無様に床を転がる。
「ちょうだいよぉっ。私死にたくないのぉっ！　ねえ、みんなぁっ！」
死にたくない。それはみんなも同じだ。だから、誰もが気まずそうに視線を逸らす。
自分は死にたくない。だからお前が死んでくれ、と。
『あはは……地味子ちゃん。優乃の気持ち、分かった？』
テレビの中から彩乃が楽しそうに、地味子ちゃん……つまり柴村に告げる。彼女は多分、僕たちにこの気持ちを分からせるためにこのゲームを仕組んだのだろう。
柴村は今、クラス全てが敵になって、たった一人で死んでいく。それは、いじめられ、クラスの中で孤立し、たった一人で死んでいった古賀優乃と完全に同じだった。

違うのは、その悲しみと苦しみが、はっきりと分かる形で目の前に存在していること。
「分かりましたぁ。分かったからぁ。ごめんなさい、謝ります。許してくださいっ」
『絶対、許さないけどね。ここまでしないと分からないって、結局分かるつもりがないってことだからさ』
自分の番になってからようやく自覚する。そんなのは、致命的なまでに遅すぎた。古賀優乃が自殺する前に気付いて、止めなければならなかったのだ。
どれだけ謝罪しても、彩乃にとっては今更でしかない。むしろ怒りは募るばかりだろう。
「あああぁぁぁぁ〜〜!!」
柴村は癇癪を起こしたように、床をバンバンと叩く。何もできない。何もすることはない。カードを奪っても、結局死ぬ。彼女が助かるには誰かからカードを譲渡されるしかないが、自分の命を差し出す人は誰もいない。
だから彼女は、絶望しながらただ死を待つしかない——はずだった。
「……柴村さん、これ使って」
「え?」
柴村は信じられないといった感じで、呆然と目の前に差し出されたカードを見つめる。あれほど望んでいたものが目の前にあるというのに受け取ろうとしなかった。罠だとか、そんなことを考えているのではないだろう。降って湧いた望外の幸運に、思考がついてこられないだけだ。

『……ねえ、空也クン』
「はい」
カードを柴村の目の前に置いてからテレビを見ると、冷めた目で僕を見つめる彩乃の姿があった。
『君は自殺志願者なの? それとも死ぬって意味を理解できてないの?』
僕は少しだけ考えてから答えを出す。
「……多分、前者に近いです」
優乃ほどではないけれど、僕だっていじめられていた。パシリにされたり、嫌味を言われたり、普段から色々な嫌がらせをされていた。クラスに友達だっていないし、学校に行くことが苦痛だった。
そんな風にいじめられることが辛いって分かっていたのに、優乃を無視したり陰口に頷いたりと、自分可愛さにいじめに参加してしまったのだ。結果、取り返しのつかないことになってしまったのだから、復讐を受け入れるのは正しいことだと思う。
僕は臆病だから、最初は死ぬのが怖かった。だけど、彩乃の動機を理解した今、恐怖よりも罪悪感が勝ったのだ。
「すみませんでした。僕も、古賀さん……古賀優乃さんを傷つけてしまいました。その罪は、償わないといけないと思います」
僕はそう言うと、テレビ画面に向けて深々と頭を下げた。

これはもっと早くにやらなくちゃいけなかったんだ。悪いことをしたのに、謝りもせずにいるだなんて、絶対にしちゃいけないことなのに……。

僕は、加害者だ。

そんな僕を彩乃は感情の一切籠らない目で眺め、何事か言葉にしようとして、再び口を閉じる。何度かそれを繰り返したあと、彼女はようやく言葉を絞り出した。

『……あなたに謝られても、もう優乃は帰ってこない。それに……』

チラッと、彩乃は様々な方向に視線を走らせる。

『あなたより悪いことをした奴らが大勢いる。あなたの謝罪がなんの意味になるの？』

「……はい」

『それとも君は、自分だけ許してもらおうってつもり？』

「それはないです。……僕を許してくれる人は、もう……」

すでに亡い。

死、というものがどこかあやふやで、まったく実感が湧かなかったけれど、彩乃が仕掛けたこのゲームでその意味をはっきりと思い知らされてしまった。死とは不可逆であり、どれだけ後悔しても絶対に戻らない、取り返しがつかないことなのだと。

『そうだね。優乃はもう死んじゃったもんね』

「はい、すみません……」

そして彩乃は口を閉ざす。他の何よりも、彼女の沈黙は痛かった。

カードを持ったクラスメイトたちが、無言でカタカタと数字を入力して生きながらえていく中、僕一人だけは、冷たい死が一歩一歩忍び寄ってくるのを感じる。

あと何分、時間が残されているだろうか。

死ぬならどこで死ぬべきだろうか。

母さんたちに、何か言葉を残した方がいいだろうか。

そんな考えが頭をよぎっては消えていく。不思議ともう恐怖はなく、僕という存在を映した映画を視ているような感覚で、まったく実感が湧かなかった。

「あ、あの、蒼樹……ごめんなさい」

番号を入力するための列は消え去り、とうとう最後の一人――柴村も入力を終えた。彼女は真っ赤な目をして、僕から受け取ったカードを返してくる。お礼のつもりだろうか。

変なところで律儀なのだな、なんて考えながら受け取ってそれを左ポケットに戻す。

僕からすれば、どうでもいいことだ。

「蒼樹。お前、その……本当は強かったんだな……」

「多治比くん」

僕の背後から、申し訳なさそうな顔をした多治比が呼びかけてくる。こんな風に彼から声をかけられたのは、間違いなく初めてのことだった。

「……別に、強いとか弱いじゃないよ」

「でも俺にはできな――」

『あのさー、偽善者クンは何がしたいの？　助けるつもりもないのにさぁ。慰めのつもり？　それってただの自己満足だよね』

多治比は痛いところをつかれたようで、ぐっと言葉を詰まらせる。彼がどれだけ正義感を持っていようと、反論ができるはずもない。実際に先ほど柴村を見捨て、今また僕を見捨てるのだから。

もっとも、自分の命を差し出せる人間の方が普通ではないのだ。だから、多治比が柴村や僕を見捨てたのは仕方がないだろう。僕は……自分に価値を見出せなかったから、そんなに命を惜しむ人がいるのならって、そう思っただけだ。

『ねえ空也クン、こっち見て』

僕は彩乃に言われるがままに視線をテレビへと向ける。

『実はあと一枚用意してあるんだ。このカードに書かれた番号を入力してもクリアできる』

彩乃が一枚のカードを片手に持ち、顔の横でひらひらと泳がせていた。もちろん番号が見えないように真っ白な裏面をこちらに向けている。

『欲しい？』

試すような目つきに、僕の中で疑念が湧き起こる。もしも、もしも僕のポケットにカードを入れたのが偶然でなく彩乃の意思ならば、彼女は僕に生き残ってほしかったのだろうか。

「欲しいは、欲しいです。僕も、進んで死にたいわけではありませんから」

進んで生きたいわけでもないけれど。

『うん、絶対あげない。これはね、私にとって何よりも大切な番号なの。絶対他人にはあげない』

「……なんであなたはそんなことを言うんですか！」

僕の代わりに多治比が食ってかかる。「偽善者」なんて呼ばれたあとに、僕を助けられる手段を目の前にちらつかせられたら、彼がそれに飛びつくのは仕方がないだろう。

『ん～……楽しいから？』

「なら、もういいでしょう。こんなに人が死んだんだ。これ以上殺す必要なんてない」

『……やっぱり君、偽善者だねぇ～』

「茶化さないでくださいっ」

僕のことなのに、多治比は僕以上に熱く、必死になってくれていた。彩乃は偽善者なんて言っているけれど、なんとかして僕を助けたいのはきっと本心からの行動だ。多治比は、僕と違っていい人だから……。

言い合いを続ける二人を、どこか他人事のようにぼんやりと眺める。

必死な多治比の横顔と、つまらなそうな彩乃の顔を眺めていたら――。

「……あれ？」

ふと、あることに気が付いた。

僕に渡さないのにもかかわらず、何故わざわざカードを見せたのだろう。渡すつもりがないのなら、黙っていればいいはずなのに。もしも見せることになんらかの意味があって、そ

れを伝えるためだとしたら――。

『君が死ぬまでの時間はあと五分』

彩乃が無情にも残り時間を宣告する。

あと五分。それが僕に残された人生の時間。

でも、僕はそんな言葉もやけに気にかかった。

彩乃はゲームの前、制限時間は二十分と言った。だが、ゲーム中は誰もスマホを取り出して時間を確認しなかったし、腕時計をつけている生徒もいなかった。両方共、意識を失っている間に取り上げられたに違いない。

僕は教室中を見回す。

この教室には時計が存在しない。いつもあるはずの掛け時計が取り外されていた。

僕たちから時間の感覚を失わせるために、そんなことをしたのだとしたら……。あと何分だとか言っても、僕らにはそれを知る術がなくて、それはつまり、彩乃のさじ加減一つで残り時間を決められるということで――。

「……ありがとうございます」

『どういたしまして。ま、せいぜいあがいてね～』

やっぱり、そうだ。

わざとだ。彩乃はわざと僕にヒントを与え、考える時間を用意した。

確信を得た僕は、思考を奔らせる。今までの言葉を精査し、行動を考慮に入れて。

――そして僕は首を動かし、教室前方、黒板の左隣にある、様々な資料が入れられた棚を視界に入れた。そこは全ての資料が引き出され、床に捨てられてぐちゃぐちゃになってしまっている。しかし、そこに答えがあるはずだった。

誰もが僕を遠巻きに眺める中、僕はそこに近づいて目的のものを探す。

さほど時間もかからずそれ――クラス名簿を見つけると、パラパラめくって……。

「蒼樹、何か手伝うことはあるか？」

彩乃の説得を諦めた多治比が声をかけてくれる。彼は彼なりに僕の力になりたいのだろう。

もう、必要ないけれど。

「ううん、ありがとう。もう、終わったからいいよ」

「終わった？」

多分これで合っているだろうけれど、まだ確実というわけではない。

僕は教卓の上に置いてある番号を入力する機械の前にまで行くと、先ほど確認したばかりの数字を入力して――。

本当に合っているだろうか。そんな疑問が頭を掠め、鼓動が高鳴る。これがダメだったら、僕は本当に死んでしまうのだ。生きられるかもしれないと思った時、僕は一瞬喜びを覚えた。

そうだ。僕だって本当は死にたくなどない。でも、安穏と生きてていいとも思えなかった。

だから柴村にカードを渡したんだ。

それなのに生きてもいいだなんて可能性を、彩乃から示されてしまって――。

結局僕はそれに……しがみついてしまった。
僕の指が、ためらう意思とは関係なしに迷いなく動いてエンターを押す。一瞬のラグのあと、取り付けられたモニターが光って僕の考えが正しかったことを示した。
僕は、生き残ってしまった。
『は～い。それでは第一のゲームしゅうりょ～。今生き残っている人たちは、全員ゲームをクリアしました～。おめでとー』
ぱちぱちと乾いた拍手と共に、彩乃が全然嬉しくなさそうな祝辞を述べた。
「ま、待ってくれ。終わった？　なんで？」
多治比が泡を食ったような表情で問いかける。
『空也クン、説明してあげて～』
彩乃は取り合うつもりなどないのか、手をしっしっと振って面倒事を僕に押しつけてしまった。
「……考えてみれば、簡単なことだったんだ。カードはクラスの人数分あったんだから」
この教室に集められたのは二十九人。そしてカードは二十九枚あった。
そう、最初に彩乃がチュートリアルに使ったカードを含めれば、だ。
中砂匠吾が殺された時、彼女はわざわざ何かを調べて無効になる四桁の数字を発表した。
さらに加えて彩乃の手の中にもう一枚カードが存在したが、これは『彩乃にとって最も大切な四桁の番号』だという。

ここまで整理すれば、ほとんど正解にたどり着いたようなものだ。ヒントはいくつもいくつもちりばめられていた。
ただ僕たちが気付けなかっただけだ。
「僕たちは、一人一人が生まれた瞬間に四桁の番号を手に入れるよね」
「――誕生日か」
多治比が口にした言葉を、僕は頷いて肯定する。
「そして、まだ使われていない番号は、彩乃さんにとって最も大切な番号。つまり、古賀優乃さんの誕生日」
『正解。まあヒントを出しまくった上での正解だから、ギリギリ赤点回避ってところだけどね～』
彩乃はそう言ったあと、「というか」と口元に加虐的な笑みをたたえながら続ける。彼女は多治比の傷口を抉ることが楽しくて仕方ないのだろう。
『偽善者クン。あなた、空也クンを助けたかったんだよね。でも、あなたがしていたことは助けたいフリ。善人の真似事。その証拠に、あなたは私から番号を聞き出そうとするだけでこんな簡単な問題すら考えようとしなかった』
結果論だと抗弁するのは簡単だ。しかし、言い訳をするには問題が簡単すぎた。
何も言い返せない多治比は、悔しそうに己の唇を噛む。
そんな多治比をハッと嘲った彩乃は、矛先を別の対象へと向ける。彩乃の攻撃対象は多治

比だけではない。このクラスにいる全員なのだ。
『数人がカードを見せ合うだけで気付けるよねぇ。でもあなたたちは気付かなかった。なんでか。カードを取られたくなくて隠したから。わざわざルールで奪うのを禁止したのに、周りの誰も信じなかった。それどころか、用済みになったカードを見せ合い、法則を探して残った一人を助けようともしなかった！』
それはまさに、古賀優乃が自殺したことの再現。
自分たちの歪(ゆが)みを誰か一人に押しつけて、それが当然と、それで仕方ないと終わらせてしまうこと。
『アンタたちはそういうクズなんだよ！　どこにでも当たり前に存在している、人間って名前の付いた汚物(おぶつ)だ！　アンタたちの間にある信頼も友情も何もかもが嘘、薄っぺらいゴミでしかない！　お前たちに存在価値なんてない！　少しでもマシな存在になりたかったら今すぐ自分で首を括(くく)れ！』
言葉の刃がみんなの心に突き刺さり、抉り、破壊する。人の一番見たくないであろう醜(みにく)い部分を引きずり出して眼前にさらけ出した。
……そして、僕はみんなより先にそれに気付いた。僕が、そんな最低な存在だってことを既に思い知っていたから、僕は罰を受けようと思ったのだ。
でも――。
「人殺しがえらそうに説教かよ」

その事実をまだ認めようとしない奴がいた。率先して優乃をいじめた山岸だ。
それだけでなく、普通の生徒の間からも不満が上がる。
「そうさせない状況に追い込んどいて……！　言うだけならなんとでも言えるでしょっ」
自分は悪くないと己の罪から目を背け、相手の罪の方が大きいから仕方ないと、自分は無罪だと、河野をはじめとした女子生徒が主張し始めた。
誰もが自分は悪だと認めたくない。だから――人のせいにする。自分以外の何かが悪だと決めつけ攻撃して自分を正当化する。人間ならば誰しもが行う、ごくごく普通の醜い行為だ。
『人殺しはお前たちもだろうがっ‼』
彩乃の怒声に対し、クラスメイトたちが次々と反論する。
「俺たちは殺してねぇ！　アイツは自殺だ！」
「アイツが勝手に死んだだけだっ」
「ちょっと口きかなかっただけでしょ。あの娘が弱すぎるだけ」
不満という形で一度噴出した感情は、もう止まらなかった。
口々に、好き勝手に、自由に、言いたい放題、思い思いの理由を吐き出していく。その内容がどれほど身勝手に聞こえたとしても、彼らにとってはそれが真実。心の拠(よ)りどころ。
決して手放すはずがない。
「やめろ！　言いすぎだ！　みんなやめるんだ！」
必死になって多治比一人がクラスメイトたちを抑えようと大声を上げる。しかし二十五人

に対して一人では焼け石に水にもなっていなかった。
そんなクラスメイトたちを前に、彩乃は――。
『あはは――――っ』
笑った。
哄笑った。
嗤笑った。
嘲笑った。
嘲弄った。
冷笑った。
失笑った。
憫笑った。
愚弄った。
嘲謔った。
『最高だよ、あなたたち。最低に最高！　そこまで突き抜けてると思わなかった！　まさかそんなにも腐ってるだなんて思わなかった。数人、多くて十数人かなって思ってたのに、ほとんど全員だなんて！』
本当に、心の奥底から、魂ごと震わせるように。古賀彩乃は笑い尽くしているようだった。

立ち読みサンプル
はここまで

二時限目――残り生徒数　27人

彩乃は顔面を片手で抱えるようにして笑い続ける。目から涙を零しながら、体をくの字に折って、楽しそうに、嬉しそうに。もう、彼女のタガが外れてしまったのかもしれない。
あまりにも一つの感情が振り切りすぎて、溢れ出した気持ちが笑いという形でしか表現できなくなっているかのように見えた。
その異様な様子に圧倒されたクラスメイト全員が口をつぐむ。そうなってもなお、彩乃は壊れた人形のようにけたたましい嗤い声を上げ続けた。
正確には分からないが、体感で秒針が五、六周するほどの時間が経ってようやく彩乃は笑いを収め始める。
『あー……くふっ……。うひっ、次行こ。……ひはっ、次』
不気味に痙攣しながらそう言うと、彩乃は人差し指をまっすぐ前に伸ばした。
『掃除用具、いれ。……あるよね』
指先の方向にはないが、確かにこの教室後方の窓際にはスチール製の掃除用具入れが設置されている。ただ、今その掃除用具入れにはダイヤル式の錠前が取り付けられていて、開けられないようになっていた。